益田市活力ある文化施設の目指すべき将来像に関する答申

平成 22（2010）年 5 月 29 日

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会

はじめに

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会は、平成 21 年 4 月から益田市立歴史民俗資料館及び益田市立雪舟の郷記念館の管理運営が、益田市の直営となったことを踏まえ、平成 21 年 10 月「秦記念館、旧割元庄屋・美濃地屋敷を加えた市内 4 つの文化施設について、それぞれをより活力ある施設とするため、また施設間の相乗的な活用を一層図るために、各施設の持つ特性と目的や使命を改めて明確にし、さらに地域や施設の将来を見据えた最適な運営手法を選択するため」、また、「益田の財産を活かし、市民が誇りを持てる魅力ある〈一流の田舎まち〉を目指し、さらに益田の文化力を高めるために、文化施設の今後のあるべき姿について、調査・審議をし、目指すべき将来像と到達するための方策について求める」という諮問を益田市長から受けた。

市町村合併が進み、合併後の新たな基礎自治体の姿が明らかになりつつある中でこうした議論を行なうことは、地域づくりの精神的支柱となりうる文化施設のあるべき姿を明確にし、まちづくりに取り組む行政と地域住民の将来的に目指すべき方向を力強く指し示す意味でも重要な意義を有するものと考える。

委員会では、ＮＰＯ萩まちじゅう博物館と協働し、まちづくり人づくり、人材育成も含めた博物館運営を行なっている萩博物館の視察も行い、益田市内 4 館と比較しながら問題点を浮かび上がらせ、議論を重ねた。行政や住民を取巻く環境は、めまぐるしいスピードで変化している。とかくこれまでの惰性に流されがちであるが、近々に取り組むべき課題から、中長期的な市内の文化施設のあり方まで含め、肝心な点で一定の方向性が示せたと考えている。

今後、提言のあった各項目について、迅速かつ着実に取り組まれることを求めるとともに、文化施設の持つ最も重要な意義は、地域のアイデンティティの創出の源泉であるということを強く意識し、益田市におかれてはまちづくり構想全体の中に位置づけ、庁内全体でこれに取り組む体制を早急に確立していただき、かつ地域住民との相互に独立した協働の体制を創り上げる一歩を踏み出されることを強く期待している。

平成 22（2010）年 5 月 29 日

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会

委　員　長　　村　上　　勇

目　次

1　現状と課題 …… 2
（1）　益田市立歴史民俗資料館…… 2
（2）　益田市立雪舟の郷記念館…… 2
（3）　益田市立秦記念館…… 2
（4）　益田市立旧割元庄屋・美濃地屋敷…… 3
（5）　文化施設（ミュージアム）の経営…… 3
（6）　文化施設（ミュージアム）の運営…… 3

2　文化施設（ミュージアム）に求められるもの …… 4
（1）　文化施設（ミュージアム）の目的…… 4
（2）　文化施設（ミュージアム）の目標…… 4
（3）　文化施設（ミュージアム）の機能…… 4
①　調査・研究 …… 4
②　収集・保管 …… 5
③　展示・公開 …… 5
④　教育・普及 …… 5
⑤　情報発信 …… 6
⑥　市民の生きがいの創出 …… 6

3　市に実施を期待する重点的施策 …… 7
（1）　益田圏域の文化情報発信センターとなる機関の設置…… 7
（2）　歴史的景観を活かす「まちづくり」の中での戦略的取組み…… 7
（3）　市民との協働ネットワークの創出…… 7

(参考資料)
1　益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会委員名簿
2　益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会開催状況等

(別紙)
文化施設４館に対する具体的な要望事例

1　現状と課題

（1）益田市立歴史民俗資料館

昭和 58 年、歴史、民俗、考古等に関する資料の収集と保存を行い、活用を図るため設立された。子供たちの学習に対応する事業と地域に密着した企画が特徴になっていて、館の活動がマスメディアを通じて広く市民に周知される努力をしている点は評価できる。

反面、旧美濃郡役所という歴史的建造物を使用していることから、絶対的にスペースが不足しており、文化施設（ミュージアム）に必要な学習やくつろぎの空間がなく、展示面積も狭隘で、収蔵面積も極めて不十分である。また、正規職員の配置もなく、決定的にマンパワーが足りない。

こうしたことから、取り上げられる内容も断片的なものとなり、益田市域にとって特徴的で、全国的にも大いに注目されている歴史や考古の展示も極めて不十分である。また、体制の不備から調査・研究の深化は望むべくもなく、博物館機能を十分発揮するに至っていない。また、ボランティアとの関係も限定的なものとなっている。

しかしながらこれらの要因は、現場や運営に携わる者によって解決できる問題ではなく、設置者であり、経営に責任を持つ市側の問題として解決する必要がある。

（2）益田市立雪舟の郷記念館

平成２年、雪舟に関する資料並びに益田家その他地域の重要な歴史資料の調査・研究、収集・保管をし、活用を図るため建設された。記念館は雪舟という強いブランドにより、県外客が入場者の７割を占めていて、益田市域の歴史文化の情報発信に一定の貢献をしていることは理解できる。

しかし、それが大きな力を持つにはやはりスケールが必要である。資料館同様、新しい時代の文化施設（ミュージアム）に不可欠ともいえる各種の空間や設備が欠落している。また、最大の問題は、事業推進の中心となる雪舟の作品や資料の収蔵数が極めて少なく、入館者を満足させる状況に成り得ていないことである。

また、配置職員の不足から、情報の発信も極めて不十分であり、周辺とのリンクも進んでおらず、関連機関との連携によるソフト面での体制作り等も現状での対応は困難と判断される。各種機能が十全に発揮されていない状況は深刻である。

ここでも経営に権限と責任を持つ行政の確固たる姿勢が求められている。

（3）益田市立秦記念館

秦記念館は、日本を代表する医学者・秦佐八郎博士の業績を顕彰するため、平成 6 年に設立された。地元の人々が菊花展などを開催して記念館の活動を支えている。

しかし、平成２０年度には、９８０人の入場者に対し、２５４万円の管理運営費を支出しており、同年度に８，４００人の入場者があった美濃地屋敷のように、地域のイベントや季節催事との連携、開館時期の限定化など、効率的な運営を目指した工夫が求められる。

（４）益田市立旧割元庄屋・美濃地屋敷

美濃地屋敷は、旧割元庄屋に伝承された文化遺産を活用し、地域間交流を促進するため、平成 17 年に整備された。道川地区振興センターの関係者や地元の方々が生き生きとして運営に携わり、手造りによるもてなしが魅力となってリピーターも多い。

しかし、人口の減少も進行中であり、地域の活動センターとして今後も手助けが必要になろう。これからも安定した運営を継続するため、好調な今のうちにさらなる魅力創出や、基盤固めに取り組んでおく必要がある。

（５）文化施設（ミュージアム）の経営

現在の４つの文化施設は、その成り立ちに一貫性がなく、それぞれ歴史的経緯の中で個別に設置されてきたもので、ミュージアムの機能を論じながら同じ方向を目指すのは無理があり、それぞれの施設は特徴的な性格を強化する方向で進むのが賢明であろう。

重要な点は、市町村合併後の県西部における中核的自治体の文化施設（ミュージアム）としては、現施設は著しく中途半端で、長期的には、これら４館とは別の視点で、新たな核となる文化施設（ミュージアム）設置を検討することが必要である。目的・理念・規模・機能・職員配置などを根本から見直す作業が、新時代の文化施設の経営主体者であるべき行政には喫緊の課題として存在していることを指摘したい。

その際、行政として、明確なビジョンと体制を構築し、常に活力ある文化施設の活動を念頭に動く担当を置き、それぞれの現場を調整しサポートする全庁的な取組ができるかどうかに事の成否はかかっている。さらに言えば、魅力ある益田市は、市のまちづくり構想の中核事業として活力ある文化施設を位置づけ、地域住民と協働する体制を構築することで初めて達成されよう。これこそが、文化施設の潜在的で本質的な力である。

（６）文化施設（ミュージアム）の運営

当面、現有４館の活動の対象が違うとはいえ、目標には共通するものがあるので、それぞれが連携を取れる体制が重要になろう。各施設の人員配置に全く余裕がなく、新時代の住民の要請に応え得る新たな文化施設（ミュージアム）設置が中長期的課題とならざるを得ない現状では、まず、センター的な機能を持った機関を立ち上げ、あらゆる事業、企画の立案、事業の実施、学校連携事業などを一元化して取り組むことにより、魅力的で効率的な運営を心がける必要がある。また、センター的な機能を持った機関を立ち上げ、まちづくり構想の中核を担うべき新たな文化施設の将来的課題を明確にし、根本的な諸問題についての情報と実践結果を蓄積することが何より重要となる。

地域のアイデンティティ創出の源泉となりうるセンター機能を持った機関は、経営主体の意志が的確に浸透することが肝心であり、こうした戦略的な取組が必要な機関の運営は行政の強い意志表示の下でなされることが肝要である。現状では、個別の現有施設では解決困難な課題が山積している 4 館と、センター機能を持った機関の運営は、市が主体となって直営方式で実施するのが望ましい。

２　文化施設（ミュージアム）に求められるもの

（１）　文化施設の目的

文化施設（ミュージアム）は、将来の地域創造を担う子供たちが、自らが生活する地域の歴史や文化に誇りを持ち、堂々と外に向かって魅力ある情報を発信し、広く全国に誇り得る「まちづくり」に参画できるようにするため、確かな知識と現代的課題に基づいた情報を学び、かつ豊かな感性を養える場と内容を提供する教育的目的を第一とする。

また、文化施設（ミュージアム）は、都市づくりの中核として十分に足る存在であり、魅力ある地域の情報を全国に発信して、多くの交流人口を確保し、地域の活性化に努めるため、その機能を最大限に発揮することを目的とする。

（２）　文化施設の目標

（１）の目的を達成するために、将来を見据えながら、我々の世代が直接的に責任の持てる範囲で２０年先までの長期的な目標を立て、そこに到達するまでの５年間程度を１期とする中期的目標を別に掲げながら、１，２年の間に近々の課題から実行に取り組むことが必要である。それぞれの短中期的目標の内容については、１の現状と課題、及び３の市に実施を期待する重点的施策の項で具体的に触れているとおりである。

市及び当該施設においても、住民の期待に答えるため、それぞれ目標を作成して、その成果について自ら積極的に情報を公開し、さまざまな評価を長期的目標実現のため活用していく姿勢が求められる。

なお、目標を達成するためには、市民の協力と理解が欠かせない。そのため、市民の意見を聞くだけでなく、市民の参加を求め、市民の生きがいにも寄与できる、行政と市民の責任ある協働のネットワークづくりを目標遂行の根底に据える必要がある。

（３）　文化施設の機能

①　調査・研究

歴史遺産や文化財に関わる内容は、広く認識されれば磨きがかかるし、深い研究が進めばさらに価値あるものになる。自分たちの町の歴史や文化に誇りを持ち、堂々と外に発信できる土壌を作り上げるため、市民自体が歴史・文化に関する正確な知識を学ぶ必要がある。そのためには、現代的な課題に堪え得る、学術的な水準に則った歴史・文化資料に対する調査・研究が必須である。また、調査・研究機能こそが、特色ある地域情報が発掘できる術であり、市民と全国への魅力ある情報発信を保障するものである。

当該地域には研究機関が皆無で、歴史資料や文化財に関する調査・研究は現状では全く手つかずの状態である。共同研究体制の導入などを図りながらも、調査・研究機能を有する機関を立ち上げることは、全国的に注目されている今の益田市にとって最優先課題と言えよう。特に益田市域の歴史・文化を特徴づけている中世遺跡や文化財の調査・研究を先行させる意味からも、機関には主たる業務として益田圏域の中世文化研究センターの性格付けが求められる。

また、まちづくりの観点からも、遺跡・史跡・文化財・社寺・文化的景観などを取り込んだ益田圏域の新たな歴史像の再構築が求められている。地域からの的確な情報発信力を確保するため、フレッシュな調査・研究機関の活動が求められる。

② 収集・保管

現時点では益田市域が抱える課題を解決するための歴史資料の収集が決定的に不足している。雪舟にしてもこれだけかという反応であるし、近世・近代の市民生活に関する資料は全く手つかずの状態である。とりあえずでも、こうした歴史資料や文化財を収集するという姿勢を明確に打ち出し、できるところからやる体制作りが必要である。

なお、散逸する恐れはないとはいえ、発掘された遺物の整理も、積極的活用を睨んだものとはいえず、増加する資料に対する保管体制は不備のままである。また、民俗資料の収集に対応している歴史民俗資料館も収蔵機能が決定的に不足している。廃校となった校舎の活用など一部資料にとって利用できる施設の確保が可能であるとはいえ、文化財の保管管理には適した施設ではない。また、徐々に増加している指定文化財の保管・管理についても、その対応を協議し、十全な保管を可能にする体制と環境について、早急に検討する必要に迫られていると言えよう。

③ 展示・公開

現在、資料館・記念館を中心に、積極的な展示・公開事業に取り組んでいるところであるが、展示空間が狭小で、収蔵作品も少ないなど多くの課題を抱え、極めて限定されたテーマで活動が行われている。また、島根県立石見美術館の活動と連携するにしても、目的が異なる県立の石見美術館に、益田市域の総合的な歴史や文化の展示、情報の公開を望むことはできまい。

市は責任を持って、主体的に益田市域の歴史・文化が総合的に展示・公開される状況を創出する必要がある。十分な展示・公開の体制が整備され、魅力的な歴史資料や文化財が展示・公開されることで、広域的で多様な交流人口に恵まれ、まちづくり事業にも寄与でき、なにより住民の自信に繋がることの意味は大きなものがあろう。

なお、展示・公開にあたっては、テーマや内容、開催時期などで、従来の通例に縛られず、弾力的な対応をとる必要があり、展示方法も地域住民に一番身近な時代や資料から見せる工夫を行うなど、柔軟な対応の検討が必要である。

④ 教育・普及

文化施設の目的で述べたように、ミュージアムは子供たちを対象に基本的な事業を展開してほしい。そのためには、すでに学校で始まっている地域学習に積極的に関わるだけでなく、あらゆる教科のミュージアム利用の可能性を追求し、事業と施設の活用を推進する学校連携に取り組んでほしい。なお、地域の歴史が列島史とどのような関係にあるか、身近な素材で解説するための視点と教材の開発などにも留意していく必要があろう。

また、地域の文化度の向上という視点からは、幼児の段階から、家族とともに各種事業に参加する姿勢が重要であり、こうした点からの取組みも研究していただきたい。

これらの取組を支えるため、職員の配置についても改善し、学校・地域に対する出前授業や講座の開催などを推進する体制を整える必要がある。さらに、こうした事業は、地域全体で取り組むという観点から、また市民の生きがい創出の観点からも、ボランティアの積極的な関与を前提にすべきと考える。

⑤ 情報発信

今回の議論で意見が集中した部門である。それだけ、地域の情報発信力が乏しい現状が問題であることと、文化施設の新たな機能として、情報発信力が今最も注目されていることがわかる。

まず、指摘されたのは、益田圏域に、行政と市民と言い換えても良いが、自らの生活する街全体を端的に自信を持って説明できない弱さがある点である。萩市の場合は博物館を官民協働で管理・運営することにより、市民が「まちじゅう博物館」という萩市のまちづくりに積極的に参加している。益田市の場合は現状から脱却するためにも、若い人たちが参加する事業の展開を目指すとともに、地域住民が知識を深め、地域が全国に誇る歴史的文化的価値をあらためて学ぶ必要がある。そのためにも、文化施設（ミュージアム）が地域情報発信のセンター的役割を果たすことで、地域に活力を生む観光振興・地域振興に弾みをつけることができる。全国的にも、図書館を含む文化施設に、情報発信のセンター的役割を期待する点から、それを支える体制が各地で整備されつつある。

また、情報発信の方法として、インターネットからの発信は爆発的な影響力を持っている。窓口を一本化し、集中的に情報を発信する、あるいは情報を求める人の欲求をストレスなしに満たすためのリサーチなど、全庁的に一体化した戦略的な取組が求められる。

⑥ 市民の生きがいの創出

今回の視察で、萩博物館のボランティアの存在を知ることができた意義は大きい。ＮＰＯ萩まちじゅう博物館というボランティア組織は、すべてをまちづくり構想に則って活動している。市や文化施設とは互いに独立しながら、調査・研究、企画などにも参画して関係を深めている。共通の目的・目標を明確に共有し合い、互いの信頼関係による協働体制の確立によるところが大きいと思われる。

これからは従来の財政的効率化を念頭に置いたボランティア観からは脱却する必要がある。オリジナルグッズの開発や、特産品を使ったメニューの開発なども含み、まちづくりという地域貢献に参加できる市民の生きがい創出の道筋は大いに検討に値するものである。自らの街づくりに関わる姿の発表の場があり、外部からの評価を得ることで人はやる気と生きがいを感じるものだ。これからの文化施設（ミュージアム）の命運はボランティアが握っている。真摯な取組が望まれる。

３　市に実施を期待する重点的施策

（１）　益田圏域の文化情報発信センターとなる機関の設置

益田市は、現有４館が、市町村合併後の新時代のまちづくりの中核となるべき文化施設としては、機能を十全に発揮できないという、致命的で根源的な課題を抱えている。

従って、今、これからの地域にとって最も重要な課題を解決するため、長期的な展望に立ちながら、現実的かつ具体的に諸課題に立ち向かうため、まず調査・研究機能を備え、地域活性化の拠点となる「益田圏域歴史文化研究センター」の設置を提案したい。

これは施設の建設を目指すものではなく、設置するのは、文化施設に求められる機能を新たに担う機関である。既設４施設を統括しながら、豊かで独自な地域情報を発信し、活動を通じて長期的展望に具体的な肉づけをする作業を併せて行う機関である。

「益田圏域歴史文化研究センター」の活動と地域の活性化は、益田市の明確な方針にかかっている。庁内全体がこの答申が指摘した点を踏まえ、全体としてその方向に向かうよう議論を重ね、近々に機関を設置していただきたい。

（２）　歴史的景観を活かす「まちづくり」の中での戦略的な取組み

「益田圏域歴史文化研究センター」は、当然、戦略的にも益田圏域が最も光り輝いていた中世の遺跡や文化財と主体的に取組むべき機関であって、益田市が誇り得る歴史的景観の復元や保護活用に積極的に発言する必要がある。

益田市域は、既設の文化施設も含め、優れた歴史的景観の中に存在しており、周辺と一体化した整備の視点が欠かせない。環境整備の計画、提言を行い、観光客の宿泊滞在を促す楽しい体験、魅力ある食や特産品のグレードアップを図るグッズの開発も肝要だ。

時間をかけて各施設や社寺仏閣・史跡・文化財を見学させるためには、豊かな歴史的景観の中で見せる工夫が必要になる。また、相互に補完し合いながら魅力ある地域を作り上げるために、宿泊・飲食施設や地場産業など多様な分野と充実したネットワークを構築しながら、文化施設とその機能を、まちづくりの戦略的な取り組みの中に位置づけるという中期的な目標を掲げてほしい。

（３）市民との協働ネットワークの創出

萩博物館の事例については触れたが、文化施設（ミュージアム）は、市民密着型で市民から必要と思われる施設でなければ存続できない。収支による実績だけでなく、市民に目を向けてもらえる施設であることが活力ある文化施設になりうるキーワードとなろう。地域づくりの観点からいえば、行政だけの取り組みでは限界があり、ボランティアの積極的な関与が欠かせない。市民が自らの生きがい創出に自覚的に取組むため、益田市も市民との協働を行政課題推進の根幹に据えるシステムの検討とネットワークの構築を、文化施設を先例として近々に開始していただきたい。

（参考資料１）

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会委員

	名　　前	所　属　・　役　職
	しまだのりさと 島田　憲郷	益田商工会議所会頭 益田市観光協会会長 益田市観光戦略会議座長
副委員長	すえなりひろあき 末成　弘明	山陰中央新報社取締役石見担当 山陰中央新報いわみ開発株式会社代表取締役社長 元山陰中央新報社西部本社代表
	たなかあつこ 田中　敦子	益田市教育委員 元小学校校長
	ほりりえこ 堀（大藤）理恵子	萩市歴史まちづくり部まちじゅう博物館推進課推進係主任 元萩博物館事務局員
委員長	むらかみいさむ 村上　勇	三次市立奥田元宋・小由女美術館館長 益田市文化財保護審議会会長 島根県文化財保護審議会委員

（参考資料２）

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会開催状況等

区　　分	月　　日	主　な　内　容
平成 21（2009）年度 第１回	平成 21 年 11 月 12 日（木） 益田市役所	・記念館、資料館の視察 ・4 館の現状と課題について ・文化的歴史的環境と文化施設のあり方について ・その他
平成 21（2009）年度 第２回	平成 21 年 12 月 16 日（水） 萩市役所	・萩博物館視察 ・文化施設（ミュージアム）の機能について ・ボランティアを含む運営体制について
平成 21（2009）年度 第３回	平成 22 年 2 月 3 日（水） 益田市役所	・文化施設（ミュージアム）の情報発信力について ・島根大学名誉教授井上寛司氏の歴史・文化調査・研究センターに関する提言の紹介 ・その他について
平成 22（2010）年度 第１回	平成 22 年 ４月 28 日（水） 益田市役所	・文化施設（ミュージアム）の将来的な課題について ・各施設に対する新たな課題について
平成 22（2010）年度 第２回	平成 22 年 5 月 26 日（水） 益田市役所	・益田市の活力ある文化施設の将来像（答申）に盛り込むべき事項について（整理案）

（別紙）　　文化施設４館に対する具体的な要望の事例

益田市活力ある文化施設の将来像検討委員会で発言のあった内容のうち、答申の本文で触れ得なかった既設の４館に対する具体的な個別の要望事例を列記した。

【4館に対して】

・４館を上手にリンクさせて楽しみながら回れるような行事の開催、季節バスの運行。
・お茶を飲みながらくつろいだり、休める空間、あるいは食事処の開拓。（楽しめて、滞留に繋がる工夫）
・楽しいイベントを絡ませた「益田学」のベースづくり。
・ターゲットを絞って狙い撃ちしたイベントの開催。
・地域の歴史・文化を発信するオリジナルグッズの開発。
・地域の食文化を通じた発信と楽しさの追求。
・貸自転車の活用。
・インターネットの活用、周辺施設とのリンク。
・情報発信には季節ネタなどの工夫とタイミングが必要。
・アクセスログの解析から傾向をつかむ戦略的対応。
・ボランティア募集して団体への解説を実施してほしい。
・ボランティアの活動には関わりが見てもらえる、光が当たる工夫が必要。

【資料館】

・椅子に座って徳川夢声や田畑修一郎の朗読が聴けるなどの対応。
・身近な時代の写真展が好評であった。一番近い歴史から見せる手法も市民参加の可能性を拡げる。
・生徒、児童に対する郷土学習センター機能の発揮と、場の確保の模索が必要。

【記念館】

・展示室で座って見れる配慮。
・木村フジオ氏が制作した雪舟の映画の掘り起こしと活用。
・散策マップの活用。
・益田元祥の日記の複製資料の作成配布、益田兼堯に関する映像の整備。

【旧割元庄屋・美濃地屋敷】

・地域の特産品・グッズの販売が可能になれば入館者の満足度が一層高まる。

【秦記念館】

・開館期間の効率化が必要。祭りや行事とリンクしたニュース性の創出が必要。
・地方は車が頼り、駐車場の確保と観光マップの活用が重要。
・ＣＡＴＶの活用。松江だと講演会の内容を流すものが日常的に放映されている。敷地の狭い施設では有効なツールではないか。